

難民救援情報誌

Trial & Error

トライアル・アンド・エラー

—— 試 行 錯 誤 ——



- ウボン石けん学校開校
- タイの村に澄んだ水を

空港の税関に向かう東南アジアの一群よりかなり遅れて
一人でこちらにやって来る子供が眼に入る
つきそう大人が居ないところを見ると
たった一人でやって来たのだろうか
首から下げた 玉石で造った首飾り
手にさげ持つバケツの中には
プラスチック製の食器
身に合わないセーター
どれもこの子が 長い旅路の果てに
遠い異国からやって来たことを物語っている

生まれ育った南国の山中に
砲声が轟き始めてから
この異国の空港に降り立つまで
どれ程の月日経ち
そして何がこの子の身の上に降りかかったのか
私にはわからない

しかし 父や母や そして故郷の山河が
この子の脳裏に 一生焼きついて
離れないことは 確かだろう
そして そうあって欲しい
たとえ このプラスチックのタイムトンネルを
抜け出たあとでも

ラオス・メオ族の孤児

—— パリ・シャルル・ド・ゴール空港にて

1980年2月

押原 譲

アジアに向かう

荻野美智子

「弟と二人で親類の人たちと港を出ました」
「今、この親類の家に住み、高校へ通っています」
「弟とは港で、はぐれてしまいました。どこにいるかわかりません」

大学3年の夏、アメリカでの一人旅。この旅が私の人生にとって大きな意味を持つものとなった。

ワシントン州の町の老人ホームで逢ったベトナム少年。生死のわからぬ弟に自転車を送るため、雑役のアルバイトをしている彼との会話。かつてテレビで見た、我先に小舟に乗り込もうとする人々の光景が、突如、自分のものとして胸に迫った。インドシナ難民との初めての出会いだ。

メキシコ国境のサンディエゴでお世話になった家庭が、ボランティアとしてカンボジアからの女性をひき取ることになった。看護婦であった彼女は、夫をポルポト兵に殺され、一人娘の死を自分の腕の中で見とった。餓死である。仕事を探しに行った職業安定所で撮った彼女の写真には、今後の生活を憂う堅い表情こそあれ、安住の地を求めて辿りついた果ての安堵の色はなかった。生命の危険の心配はないにしても、英語のわからぬ彼女にとって、ここでの暮らしは、毎日、毎日が辛い日々だったと思う。

アメリカという日本から離れた土地でのインドシナ難民との出会いは、私に初めてアジアへの目を開かせてくれた。自分の国に住みたくとも住めない人。国家の狭間で、個人の責任ではないところで起きた出来事に苦しめられている人々、そんな難民の存在を教えてくれた旅であった。

それから1年半の後、大学卒業を前に、JVCの東北タイでの遊戯場建設のプロジェクトに参加した。わずか10日間の滞在で、難民キャンプに入ることもできなかった。何の役にも立たず、無力感を味わいバンコクに戻った。この街には、近代的な建物のすぐ裏に、スラム街が建ち並ぶ。立派な邸宅のそばで、裸足の子どもが遊ぶ。貧富の差が

日常となっているバンコクは、一種の不快感を与えた。しかし、それはアジアの現実だ。

卒業後1年間、大阪で銀行員生活を送る。コンピュータの電子音の響く職場。経済的に恵まれていても、アメリカでの出会い、タイで感じたことが心を離れない。JVCのOBからなる、京都の「海外ボランティアをむすぶ会」での活動が、生活の主要な部分を占め出した。

銀行員をやめ、4月から教師になることが内定していた。しかし、仕事を持ちながらの活動は、満足 of いくものではなく、転職を機に、一度この活動に納得がゆくまで関わる決心をした。教師になることを望んでいた親をときふせ、1年後、親元に戻ることを条件に上京した。

4月より、JVCの東京連絡事務所で活動している。難民問題に本格的に関わる時期が遅かったと歯がみをすることもある。カンボジア難民が世間の注目を浴びていた1979年、アメリカを旅行していた。あの頃の問題意識の低さに恥ずかしさを覚え、今必死で追いつこうとしている。

事務所での活動は、直接難民と接する機会は少ない。難民問題が今だに解決されていないにもかかわらず、政府のUNHCRへの援助額は減少しつつある。援助の必要がある限り、JVCのような民間救援団体の存続は不可欠である。インドシナ難民のみならず、世界中いたるところで援助を必要とする人々のため、長期的な視野で活動できるよう、今基礎がための段階にきている。忙しい毎日だ。

しかし、両親との約束が、重くのしかかる。正直に言うと、一年後、親元に戻る気持ちはない。「救援」を通して、アジアの抱える問題を考えてゆくつもりだ。アメリカでの難民との出会いから3年。JVCをその活動の場として選んだ。第3世界の人々と共に生きるこの選択は、決してゆずることではない。

ウボン「石けん学校」開校

田島 誠

去る7月9日、ラオス難民キャンプの一つウボンで行なわれた、JVC「石けん学校」の開校式に参加した。

ウボンは首都バンコクの北東、約600kmに位置している。バンコク20時発の夜汽車に揺られ、次の日の早朝6時にはこの地を踏むことができる。この街にはベトナム戦争時、北爆のため飛び立つB-52の発進地があったという。田んぼの中に出現する整然とした街並みは、米軍の落とした影を思わせる。

街なかから車で約20分の距離にウボンキャンプがある。このキャンプは、1977年に開設された。現在はノンカイキャンプなどから移送されてくる難民によって、キャンプの人口は11,518人(1982年6月30日現在、UNHCR調べ)にふくれあがっている。

今年の4月8日に、JVCの実施したアンケート調査(798軒:全体の44.9%対象)によると、ラオス本国に帰ることを希望している難民が全体の60.3%を占め、キャンプ人口の半数以上の者がやがてラオスに自主的に帰ることが予想される。JVCは、これらの難民を対象に職業訓練の一環として「石けん学校」を開設することにした。



どこでも作れる石けんを

キャンプ内の衛生状態は悪く、皮膚病にかかっている者が多い。石けんが不足しているため、服も満足に洗えない。もちろん、キャンプ内での収入を得る手だてを持たない人にとっては、石けんを購入することはできないし、配給も限られている。

上述したアンケート調査の結果、約8割の難民が石けんの製造法を学ぶ意志があるとわかったため、プロジェクト開設に踏みきった。

このプロジェクトで作る石けんは、キャンプ内の

①	I. 苛性ソーダ製石けん ① 苛性ソーダ1と水2を鉄器に入れ混ぜる。酢は、苛性ソーダを誤飲・誤触した場合のため必ず備えておく。 ② 植物油または動物油を180℃(水滴が底まで届かず浮上する程度)まで熱する。	③
②	③ 油6と苛性ソーダ水4の割合で混合し、約20分間、攪拌。 ④ 気泡が出たら型へ流し込む。1週間放置する。白く浮いた苛性ソーダは削り取る。	④

病院を通して、難民に配給されるほか、キャンプの外のタイの農村へも配布される予定である。しかし、このプロジェクトの目的は、衛生状態の向上にとどまらず、難民達が本国へ帰った後も自らの手で石けんを造って役立てることができるようにすることにある。

援助を考える

物を与えるだけの援助は、援助が途絶えてしまえばそれきりだが、物を造り出す技術を伝える援助は絶えることはない。だからここでは石けんの製造量よりも職業訓練としての性格を重視している。同様の主旨から、JVCではいくつかの技術訓練プロジェクトを設けている。しかし、他のプロジェクトに比してこのプロジェクトが特に注目されているのは、方法さえ知っていれば身近にある天然の材料を使って、どこでも造れる製造法を伝えるという点である。

石けんの製造法のひとつで、必要な原料は灰汁(Lye)と牛脂だけである。これはラオス国内なら、どの地域でも安価に手にはいる。出来上がる石けんはロウの塊まりのような素朴なものだが、もちろん環境や人体に与える害はない。日本では、石油から製造される合成洗剤が大量に使われているが、それが公害の原因となり、人体を蝕み環境を汚染している。

意義のある援助とは、ただ物を与えるだけでなく対象となる人々の自立を助ける技術を身につけさせることであると思う。その際慎重でなければならないのは、人々の生活している環境に合った技術を伝える必要があるということである。

さらに、私達が持ち込む技術が「公害」をもたらすような結果につながるような配慮しなければならない。

プロジェクトの将来性

ウボン・キャンプは、タイ政府の計画では今年末をもって閉鎖となり、このプロジェクトも終了せざるを得ない。

しかし世界の至るところで劣悪な衛生状態の中で暮らさざるを得ない人々が存在する。

この現実を改善するためには、数々の方策が考えられる。「井戸を掘る」または「井戸水を清潔な水にするシステム作り」「地域内の農作物自給率を高めて栄養状態の向上に努める」「トイレ建設」「保健・衛生指導を行なう」など、数えきれない程のアプローチがある。同時にこれらすべてのアプローチが必要不可欠であるともいえる。

例えば、ある村で井戸を掘って清潔な飲料水が得られるようになったとしても、その村にトイレがなく「飲料水」と「汚水」が混じってしまえば何の意味もない。またトイレがあったとしても、石けんで手を洗うなどの習慣づけができていなければやはり伝染病などの根を断つことはできない。

今回、非常に限られた形で始まったこのプロジェクトも、そういった意味で将来性のあるものと言える。たとえウボンキャンプが閉鎖された後も、そこで得た経験は必ず他の地域で役立つに違いない。私はウボン「石けん学校」開校がその第一歩となることを願って止まない。

①	Ⅱ. 灰汁製石けん ①木製の樽、プラスチックのバケツ、または太い竹等の底に小さい穴を沢山あける。 ②灰は堅い木のものが好ましい。バナナの灰でも可。 ③集めた灰汁の濃度を調べるには生卵を浮かべてみて、浮面を3cmにする。 ④牛脂を熱し、火から降ろし、油2、灰汁1の割合で混合する。粘り気が出たら型へ流す。	③
②	④	

閉鎖される難民キャンプ—— I

ノンカイ再訪記

深津高子

1982年3月31日、ノンカイ・キャンプはタイ政府の方針により閉鎖された。しかし、キャンプ内には今なお7000人の難民がいる。今回は久しぶりにノンカイを訪れたボランティアが、閉鎖されたキャンプの様子を伝える。

●一年ぶりのノンカイ・キャンプ

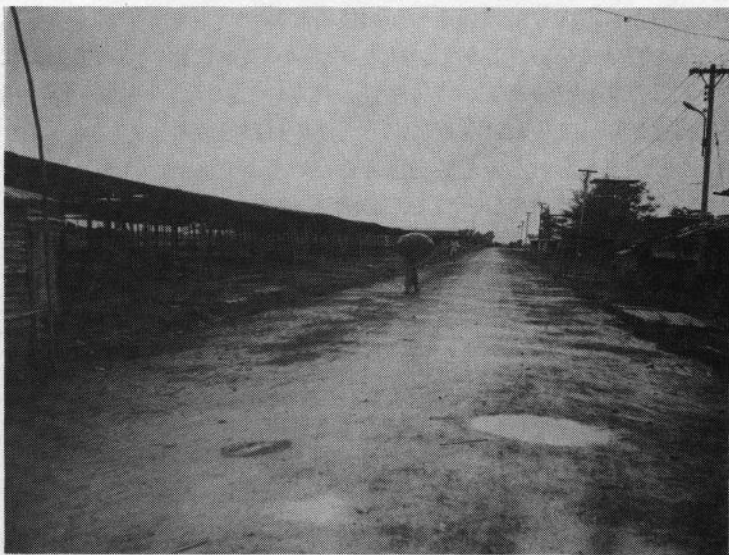
バンコクより北東約570キロ。ノンカイ行きの寝台車の2等席で、約12時間。私はメコン河沿いにあるノンカイ・キャンプに向った。ちょうど一年前の7月7日、私の教えていた日本語のクラスで七夕を祝った。その生徒のほとんどは、短冊に書いた願いが叶い、現在日本で生活していてもうここにはいない。

以前キャンプに入るには、タイ政府発行のボランティア通行書が必要であったが、今回は一度も許可証を見せずにすんだ。

全く人気のない玄関。自転車サムロが、あてのない客を入口で待っている。かつては3万人を収容したこのキャンプ。ラオスの首都ビエンチャン出身者が多く、ビエンチャンをそっくりそのままもってきたような活気があった。しかし今は、目抜き通りのマーケットもひっそりとしている。小雨降るキャンプ内を歩くと、所々に人が集まっている。一時間3パーツ（約30円）のテレビ館からは、タイの素朴な民族音楽が流れ出て、入口には駄菓子屋がある。各国からの民間救援団体による、語学・職業訓練がなくなった今、暇な時間をつぶす若者で賑わっている。

昔JVCが買いつけていた、ノンカイ・ハンディクラフト店のあたりも全部取りこわされ、まるで廃墟の町ようである。日本語学校の校舎も、今年5月の暴風により跡形もなく、吹きとばされていた。

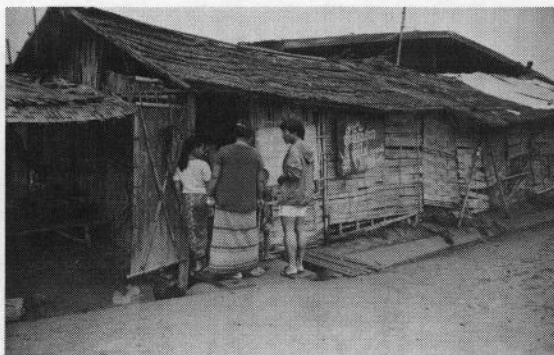
元日本語学校の近くで、タイの民間団体が英語の授業をやっていた。ファニヴォング氏というラオス人が、20名ほどの若者に英語を教えていた。彼は去年の12月、ノンカイへ来てキャンプ生活7ヶ月目で



ある。当時のラオス最高軍司令部の参謀本部で働いていたが、1962年以来、軍の視察のため、ラオス政府からアメリカへ3度派遣されたと、流暢なアメリカン・イングリッシュで話してくれた。この教室では、ラオスへの帰還を目標にしている16才以上の若者達、約100名に英語を教えながら、「愛国心」や「軍部の必要性」を説き、また女性には「看護婦の基礎知識」を教えている。

●民間救援団体は今

かつてノンカイ・キャンプでは、20近くの民間救援団体が活動していたが、現在活動している団体は6つである。その中で、キャンプの土木建築と修理を担当しているNorwegian Church Aid（ノルウェーの団体）の現場コーディネーターのケツアドン夫婦。彼らは、2年以上前からここに住むラオス人難民である。3人の子供と一緒に、キャンプの入口近くの本部の家に住んでいる。夫人にインタビューしてみた。



テレビ館と言っても竹でできたほったて小屋。暇つぶしに難民たちが集まる。

— ラオスにいる頃は何をしていたのですか。
「主人は土木建築専門家で、私はビエンチャンで英語の教師をしていました。今はキャンプの中で通訳もしています。」

— 第三国定住のチャンスはあったのに、なぜ2年間もキャンプでボランティアをしていたのですか。
「私達は、いつかラオスに帰りたいと思ってます。ノンカイに難民が一人もいなくなるまで、ここでボランティアとして活動したい。」

真摯な眼差しが印象的な夫妻であった。

民間救援団体の活動も最少限に縮小された今、ある意味で新しい動きを見たような気がした。一部の難民は、何もする事なく、暇つぶしにテレビ館で一日過ごす者もいたが、一方ではケツアドン夫婦や、ファニヴォング氏のように、真剣に自国や、自国民の将来を考えている難民がいる。一年前、私がここで日本語を教えていた頃の、第三国定住ブームのノンカイでは見られなかった動きである。

今、このキャンプには、ラオス人による、ラオス人のための教育の場や、ラオスの将来を考える場が本当に必要とされているのではないかと思う。

(次号につづく)

ふかつたかこ 1981年4月から10月までノンカイ・キャンプで日本語の教師を勤める。その後バンコクオフィスで、渉外、広報など多方面にわたり活躍。

★ノンカイ・キャンプ小史

▶ 1976年3月に、ビエンチャン周辺から流出してきた主に低地ラオス人を収容するため、タイ内務省管轄のもとに設けられた。都市近郊からの難民が多いため、元教師、医師、弁護士や仏語、英語、日本語などを話す中国系ラオス人も多い。

▶ 1978年の難民収容数 36,322人。そのうち低地ラオス人が67%、その他は山岳民族のモン族27%、タイ・ダム2.5%、タイ・ヌング1.5%であった。(UNHCR国連難民高等弁務官調べ)

▶ 1980年2月15日、原因不明の大火災が発生し、キャンプの70%(17,703名)が焼け出され、死者1名が出た。UNHCRの指示のもとに各民間救援団体は復興援助に協力した。発足まもないJVCも、寄付金と緊急救援のメンバーを送ってこれに参加した。

▶ 民間救援団体の数は20近くあった。活動内容は医療、保健衛生、職業訓練、教育、土木建築、定住促進等。JVCの活動は80年4月に始まる。主な仕事は貯水池の浄化と環境改善を兼ねた蓮植えプロジェクト、小学校建設、教育レクリエーション、日本定住希望者のための日本語教育、ハンディクラフト(手工芸品)の買いつけなど。

▶ 1982年3月31日、ノンカイ・キャンプは正式に閉鎖されたが、まだキャンプ内には約7,000人の難民がいる。



キャンプ閉鎖と 難民の流れ

タイ政府による難民キャンプ統廃合政策発表から約一年が過ぎた。JVCバンコク発行の月報資料をもとに、その後の政策の行く方を追ってみることにした。

地域別にみると、山岳民族のキャンプでは人口の変動があまりみられない。一方、一番変動が激しいのはカンボジア人のキャンプである。

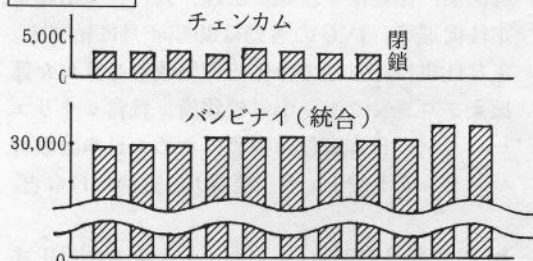
閉鎖されていくキャンプを見ると、人口が3,000人～6,000人程度に減少すると、ひと月程で閉鎖されるようだ。

また、ラオス人のキャンプであるノンカイでは、縮小計画が順調に実施されている様子である。

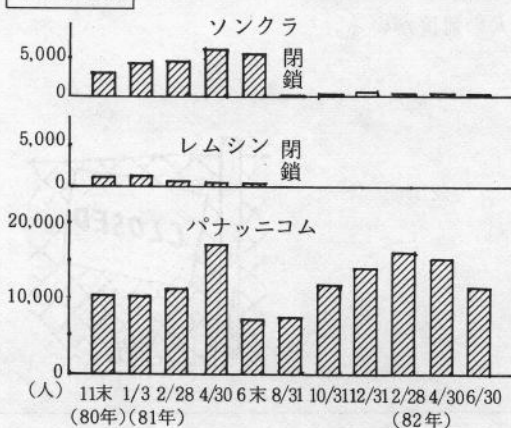
しかし、タイ国内の難民総人口を見ると、最近の半年間のひと月平均の減少はわずか1,800人程度でしかない。そして、その100倍の人数の難民達がいまだにキャンプ収容生活を余儀なくされているのである。



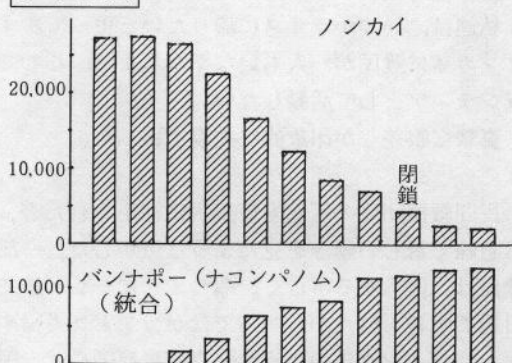
山岳民族



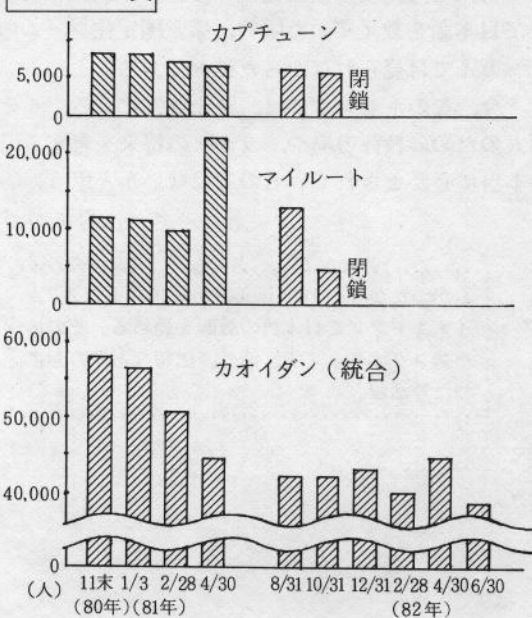
ベトナム人



ラオス人



カンボジア人 (81年6月は資料未入)





ソマリア難民●

● UNHCR(国連難民高等弁務官) ミンジャ・ヤンさんに聞く

ソマリア難民 — エチオピアとの国境地域の35キャンプに今も70万人の難民がいる。1980年に報道された、飢餓線上をさまよう状況から2年が経過した。その間 UNHCR を始めとする国際機関、各国の民間団体による救援活動が組織的に進められてきた。この7月現地を訪れたミンジャ・ヤンさんに最近の話を聞いてみた。

ソマリア難民の背景

エチオピアのオガデン地方に住むソマリア人の解放闘争が、1976年以来本格化し、これがソマリア・エチオピア政府間の紛争に発展した。戦闘の続くオガデン地方から、大量の難民がソマリアに流れ込んだ。アフリカを襲った、数年におよぶ大旱魃による食糧・水の欠乏も難民の流出に拍車をかけた。そのほとんどが、女性、子供、老人である。

▶ソマリア難民キャンプで難民たちに会って、一番印象深かったことは何ですか。

難民たちは、一日一回の小麦がゆしか食べていませんが、とても明るく人なつっこい人々だというのが、印象に残りました。この地域は、歴史的にアラブ人の影響が強いので、住民のほとんどがイスラム教徒なのです。しかし他の地域のイスラム教徒と違って、女性はとても積極的で、向こうから話しかけてきます。

▶ソマリアの難民というと、悲惨なイメージがあるのですが、今の状態はどうでしょうか。

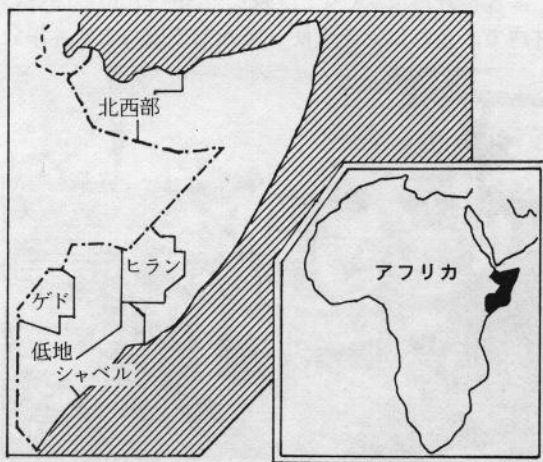
地域によって多少は異なりますが、全般的に、2年前の緊急状態と比べると、食糧事情などは改善されています。しかし衛生管理については、未だに問題が残っています。例えば、難民のほとんどは遊牧民族なので、キャンプなど一定の地に長期過ごすことに慣れていないことから、汚物の処理などが問題

になります。

今回、朝日テレビの取材に協力したのですが、取材班の人々が、あまり悲惨な姿でないので日本人に訴えられない、と言っていました。難民とは、単に今にも死にそうな人々ばかりではないのに、日本の一般の人々がそれを理解していないということが、非常に残念に思われました。

▶現在どのような救援活動が行なわれていますか。

30以上の各国の救援団体が、医療、公衆衛生、物資輸送などの分野で活動しています。今は緊急援助から、難民の自立を促す農業などの技術訓練に、活動の重点が移行しつつあります。UNHCRの現地スタッフも、日本からトヨタ、ソニーなどの色々な製品は来るが、人は来ない、としきりに言います。唯一、6才からイタリアで育った日本人の建築家が、イタリア人の夫君と一緒にヒラン地方で活動しているだけです。(次号につづく)



タイの村に澄んだ水を

給水プロジェクト・リーダー

木村信夫さんにインタビュー ききて：本橋 栄



— Q 今回は、何のために帰国されたのですか。

これから本格的に始まる、「給水プロジェクト」に、資金援助をしていただく団体と交渉するためです。今までは、タイ・カンボジア国境の難民村で井戸を掘っていましたが、今度は国境周辺のタイ農村で、給水プロジェクトをすることになったのです。

— Q なぜ？

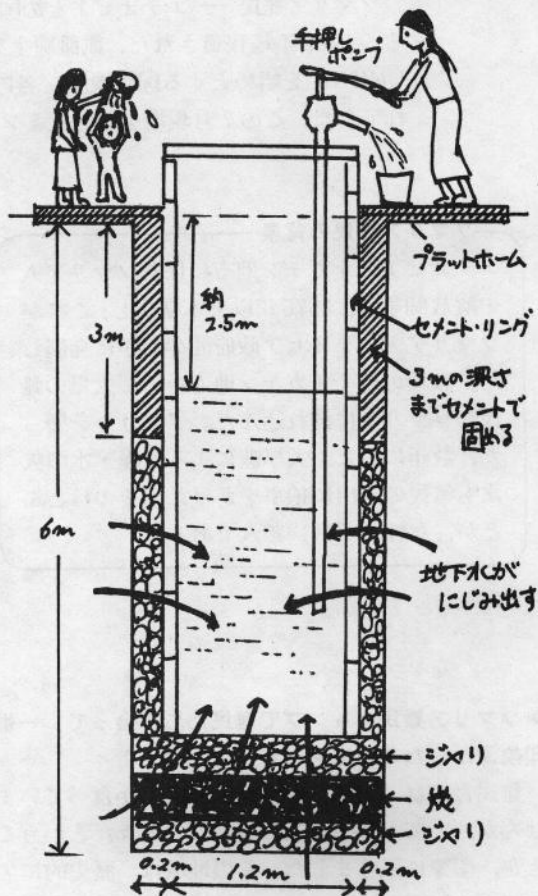
安心して飲める水がないのは難民村も、タイの農村も同じです。人々が使っている川の水や不完全な井戸の水は、塩分や鉄分が強すぎたり泥水や病原菌の混ったにごり水です。これがアメーバ赤痢や眼病の原因になっています。JVCは、これまでも難民の流入で影響を受けたタイの農村に対する活動も重視してきたわけですが、今回、水供給の計画案を、タイ軍の最高指令部に持ち込んだところ、同意が得られたので、実施の運びとなったのです。

— Q そのへんの経過を聞かせて下さい。

今年3月～5月、東北タイ7県で飲み水供給の実状調査をしました。そしてブリラム、プラチンブリ、チャンタブリ、トラート、スリンの5県の、42ヶ村で、平均3本づつの井戸を、約2年かけて掘る計画をたてました。そして6～7月の1ヶ月、ブリラム県のバン・ノン・ウェン村で実験プロジェクトとして3本の浅井戸をつくりました。

— Q 浅井戸といいますと？

こんな井戸です(図を参照)。5m～10mの深さの井戸で、これはクワを使って人力で掘れます。深い

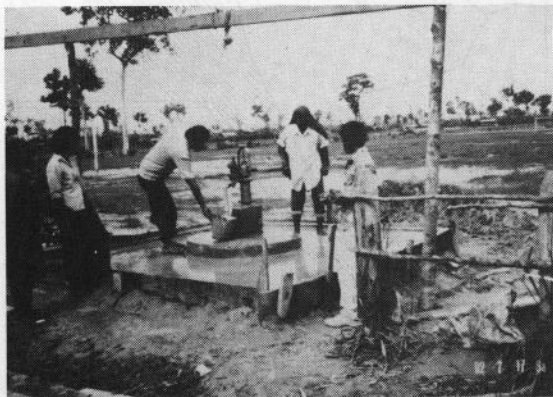


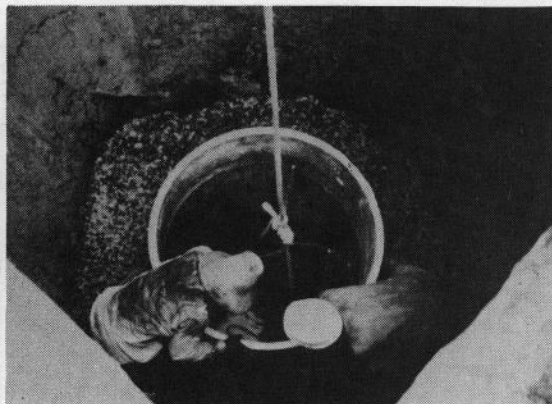
大がかりな井戸のほうが良さそうに思えますけど、深くなれば、掘るにも大がかりな機械が必要ですし、水を汲むにも、モーターがいります。それを動かす燃料代を村人が負担しなければなりません。

また水源が深かったり、地盤が堅かったりで、井戸水が得られないところでは、雨水を貯めておくためのセメントのタンクが有効です。

— Q どのようにして村に入っていくのですか。

JVCからは、タイ人1人を含む3人のメンバーでチームを組んでいます。まず村長さんをたずねて、計画を説明し、村人と作業の打ち合わせをします。「これまで、いろんな人が調査に来たが、それきり





だった。よくぞ掘りに来てくれた。」と言って歓迎してくれました。自分たちのための水づくりですから村人も積極的でした。雨が降ると、彼らも畑仕事が気になるようで、思うように人手が集まらないこともありましたが、だいたい5人～12人位の村人が、少年から若者、年配のおじさんまで交代で参加してくれました。

— Q 水質や水源はどうやって調べるのですか。

水源は、浅い井戸の場合、村人がよく知っています。水質、特に塩分・鉄などの含有量は、簡単な試験器具があるので自分たちで調べられます。バン・ノン・ウェン村では鉄分が20ppm以上も検出され、とても飲めない水だったのですが、きちんとした井戸を作ったことによって2.5ppmまで下がりました。

始めは、池の水のような緑色の水なんです。これこれの方法でやれば、きれいな水がでてくるんだと、村人に説明して仕事にとりかかります。井戸ができて実際水をくみあげてみるまで、正直言って実に心配でした。だからほんとに透明な水が出てきたときはうれしかったですよ。村人もそれは喜んでくれて、「もうきたない水は飲まない。」と言ってね。そのへんのところは水に恵まれている日本人の感覚ではわからないでしょう。

— そういえば、来日したクロントゥーイ・スラムのブラティブ先生も、自分たちが飲んでる水は、日本でトイレに流れる水よりきたない、と言われたのが印象に残っています。

— Q 井戸掘りにかかる費用は？

セメント・リング、セメント、ジャリ、砂、炭、ハンドポンプ、パイプ、その他バケツやザル等の道具、輸送費などを含めて井戸一本につき約8,000パーツ（1パーツ約10円）かかります。42ヶ村で約120本の井戸と9基の貯水タンクの費用として、日本円で2,000万円、これに従事するボランティアの

生活援助費や事務経費などを含めると、およそ2,500万円が必要です。これを何とか調達しなければなりません。

— Q 村人とのコミュニケーションは？

こみ入った話は、タイ人スタッフの通訳で、普段はカタコトのタイ語で話しています。日本人には好意的ですね。食事くらい用意していっしょに食べたんですけど、予算がなくて、氷水だけを用意しました。炎天下で重労働をするのに彼らの昼メシはご飯にナムプラ（魚から作る調味料）だけでした。たまには地酒をさげていって、みんなで飲んだりしました。

— Q 村の衛生状態はどうなんですか。

村では栄養と医療の欠乏から、マラリア、栄養失調、寄生虫、赤痢などが蔓延していました。

村にはトイレのある家のほうがまれで、井戸は地表から3mのところまで周囲をセメントでふさいでおかないと、汚水がしみ込んで水が汚れてしまうんです。そういった基礎的な知識は辺境の村々までゆきわたっていないんですね。水の供給と公衆衛生はいっしょに取り組むべき問題と言えます。

また、食事の前に手をきれいにするといい習慣がない。そのうち、村人といっしょに汲みあげたきれいな水で自分たちの作った石けんで手を洗うデモンストレーションのようなことが出来たらいいなと思っています。

— Q 最後に、援助のあり方について

難民にしてもタイの農村でも貧しいところには、日本からいい物をたくさん送ったらいいじゃないかという発想があると思います。しかし複雑な機械や高度な技術はそこに根づかないんです。動かすのに石油や電気が必要であったり、消耗品や部品の補充や壊れた時に修理できる者がいないのです。だからその地域の実状にあった技術を持ち込むとともに、人を育てる援助が必要なんです。時間はかかるでしょうが、村人の中から基本的な知識を指導できるような人が育てば衛生観念などの意識改革も進むでしょう。

そのためには、われわれはもっと経験を積んで力をつけなければいけませんね。

… 木村信夫さんのプロフィール …
大学を中退して建設会社に勤める。ダム工事の現場でJVCの井戸掘りの記事を目にしてタイへ。81年7月～11月まで難民村での井戸掘りに参加。12月～2月、バンコク・オフィスで活動。27才。

JVCプロジェクト

1982年6月25日現在

活動地名	活動内容	活動費 拠出者名	担当者
ウボン (ラオス人 キャンプ)	自動車整備学校 生徒数128名、スタッフ10名。 11月生は5月下旬から卒業試験。2月生はブレーキ構造の実施学習中。4月生は電気関係学習中。 織物学校 生徒たちは作る楽しさを覚えるとともに、出きあがった作品の良し悪しも判断できるようになった。 15才前後の思春期を迎えた女子約40名が現在学んでいるが、技術習得を通して、女性としての成長も助長できるようにと、織物の授業以外に、①道徳的な教育、②ラオス語の授業、③民族舞踊等のカリキュラムも継続の予定。 日本語学校 初級：基本文型・カタカナを学習。 中級：授業は話しことば中心。JVCボランティアの仕事を手伝いながら、実際の日本語に接する。 日本定住希望者および第3国への定住希望者が減の傾向。 図書館	UNHCR 一般寄付 裏千家 金村 悦江 ボランティア募集中 ・自動車整備学校のコーディネーター (9月初旬より) 神奈川県 大野 樹※ UNHCR 磯辺 元秀	寺島 正一 ユタナ

本および本棚にダンパーをつけ、本の数がすぐ確認できるようにした。「ラオス語-英語」「ラオス語-フランス語」の辞書計4冊がUNHCRより届いた。

ボランティア募集中

JVCプロジェクト

活動地名	活動内容	活動費 拠出者名	担当者
クロントゥーイ・スラム (バンコク市内のスラム)	図書館 電気工養成訓練所 第4期コースの3ヶ月めに入った。6月から7月にかけて屋内配線(木造およびコンクリート家屋)と屋外配線(通路など)を行う予定。 学費援助 スラムには貧困のため教育を受ける機会をうばわれている子供たちが多い。JVCはプラティープ財団を通し、一昨年10月から、計60人の児童を、少なくとも小学校教育を終えるまでは援助する予定である。 さらにこの60人とは別に、JVCだけで新しい奨学金プロジェクトを始めた。子供たちへの調査、面接などの結果、現在9人の児童に対し、援助を続けていく予定である。奨学金を受けられる条件は、家庭が貧困で、学業成績に関係なく、本人に学業を続ける意志があることである。	神奈川県 一般寄付 モラロジー研究所	福村 州馬※ 釘村千夜子・高塚 政生 スリン ソーカバニチ プラキット 小川ひとみ
給水プロジェクト (東北タイの農村)	本文参照	モラロジー	木村 信夫※・スラポン 入江 智幸
ボランティア募集中 ・給水プロジェクトのアシスタント			
ホーキンスロード (シンガポール ベトナム人キャンプ)	管理運営全般 環境整備・公衆衛生	UNHCR	熊岡 路矢※ マリー・マルティース ・キャマル
タ ケ オ (カンボジア)	井戸掘りのための準備中。		簗田 健一※
バンコク事務所	岩崎駿介代表 星野昌子事務局長 他22名	ボランティア募集中 ・月報編集のアシスタント	
東京連絡事務所	税田芳三※ 田島 誠※ 他20名	ボランティア募集中 ・T/E企画, 編集, 発行 ・資料, 写真などの情報担当	

※はリーダーです。



山岳民族	55,581
① チェンカム	101
② チェンコン	6,263
③ バンナムヤオ	9,998
④ ソプトゥアン	7,118
⑤ バンビナイ	32,679
ラオス人	29,873
⑥ ノンカイ	2,068
⑦ バンナボー	12,873
⑧ ウボン	11,518
カンボジア人	88,422
⑨ ルムプク	856
⑩ カオイダグ	38,819
⑪ バンケー	17,864
⑫ カンブット	20,592
ベトナム人	8,267
⑬ シキウ	6,504
⑭ ソンクラ	122
⑮ バンコクT/C	648
⑯ パナニコムT/C	2,723
⑰ パナニコムP/C	11,397
総合計	182,143
(ボートピープル)	7,394
(ランドピープル)	174,749

● 岩崎代表帰国

岩崎駿介代表が仕事の都合により、この7月をもって代表の役を降りることになりました。

「JVCは組織的確立をめざして、今一番難しい時期を迎えている。若い人たちが困難な状況にめげず新しい活動を切り開いてゆくのを切に希望している。」

● 学習会報告

6、7月の学習会では、3回にわたりベトナムをテーマに取りあげました。まず歴史の概観から入り、ベトナム戦争に取り組んでみました。一般的な政治状況にとどまらず、「枯葉作戦」の深刻な影響をふまえ、難民問題との関わりにおいて障害者問題を討論したり、当時日本で起った市民運動としての反戦運動についてその問題点を考えてみました。

7月21日には、国連軍縮特別総会に参加された栗野先生の報告を伺いました。8、9月の学習会は、これに引き続き軍縮問題を取りあげたいと思います。

● 写真展報告

7月16日から25日まで、東京渋谷の児童会館において、全国縦断写真展「インドシナからやってきた子どもたち」の東京展が開催されました。連日、多くの方々に足を運んでいただき、好調な滑り出しとなりました。今後の地方開催につきましても、みなさまのご支援をよろしくお願い致します。

また写真展開催中に行ったバザーでは、絵本131,760円、ハンディクラフト161,320円と売上げをあげることができました。インドシナ難民、クロントゥーイ・スラム住民への援助金として有効に使わせていただきます。ありがとうございました。

去年の7月半ば、タイに出発して8月いっぱいパナニコムのキャンプで活動しました。私にとっては初めての外国であったタイ。不安な気持ちでいっぱいでした。恥ずかしいことに私は難民について何の知識も持たずキャンプに入りました。ただ「キャンプの子供たちは子供らしく歯をむき出して笑うかな」とか「生きていくのに大変であり笑わないかな」ということばかり心配していました。パナニコムのキャンプに入ったのはバンコクに着いて4日めでした。カンボジア人対象のレクリエーション活動と図書館プロジェクトに参加して、絵や歌などを教えている時の子供たちの一生懸命な顔を見ていると、来て良かったという気持ちでいっぱいになりました。子供たちは本当によく笑います。キャンプの中での生活が苦しく、窮屈な分だけ楽しめる時には心から楽しもうとするようにも見えました。2度だけ、日本に帰りたと思ったことがあります。一度目はキャンプの医療センターを見学させてもらった時、片足のない4才の女の子が松葉杖を使って歩行練習をしているのを見た時です。その子が私の方を見て微笑んでいるので、余計に胸にこたえたのです。二度目は、ひどい下痢と腹痛に悩まされた時でした。でも、今になればそれもいい経験でした。今年の3月に学校を卒業し、今は両親の元に帰り勤めはじめ、何の不自由もなく暮らしていますが、時々、あのキャンプで過ごした1ヶ月間のように充実した日々をもう一度生きたいと思うことがあります。

(抜粋)

H.Kさん(徳島)



編 集 後 記

◇「ウボン石けん学校開校」「タイの村に澄んだ水を」の記事は、いずれも地域の公衆衛生の問題をとりあげています。今後の援助活動の方向を考えるうえで、読みくらべていただきたいと思います。

◇今回は「閉鎖される難民キャンプ」第一弾とし

て、ノンカイキャンプの様子をお伝えしました。今後もラオス難民の本国送還が実際どの様に行われているのか、ベトナム難民の第三国定住はうまくいっているのかなど、引き続き追っていく予定です。

会 計 報 告

事業費内訳

(単位: パーツ)

6月会計報告 (82.6.1 ~ 82.6.30)

(単位: パーツ, 1 パーツ約10円)

活動地名	プロジェクトの内訳	金額
パナニコム	日本語学校, 教育レクレーション	57,641 ⁷⁵
クロントゥーイ	職業訓練, 図書館, スポンサーシップ	29,175
ウボン	日本語学校, 自動車整備学校, 織物学校	54,403 ⁵⁰
国境	物資輸送	30,000 ²⁷
カオイダン	自動車整備学校	78,298 ⁷⁵
給水プロジェクト	給水活動費	54,501
カンボジア	CARE に拠出	150,000
バンコク・ボラン ティア・ホーム	6月分家賃および電気・水道代	5,107
バンコク事務所	諸経費	134,197 ²¹
合 計		593,324 ⁴⁸

内 訳	収入の部	支出の部	残 高
前月繰越金			6,069,307 ⁵⁸
寄付送金	973,243 ⁵⁰		
雑収入	6,938		
受取利息	4,286 ¹⁴		
仮払金	20,066 ⁶¹		
東京連絡事務所		191,248	
諸経費		593,324 ⁴⁸	
合 計	1,004,534 ²⁵	784,572 ⁴⁸	6,289,269 ³⁵

JVCとは

Japanese Volunteer Center は1980年2月、タイの首都バンコクで設立された民間救援団体です。

1979年の暮れのインドシナ難民の大量流出を、きっかけに、日本から救援に駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人たちが一体となり、現在の組織の原形ができあがりました。

当初はタイ・カンボジア国境への物資輸送など、欧米の民間救援団体を補佐するものでしたが、現在は日本から寄せられる寄付金と各支援団体の援助金により、独自のプロジェクトを展開しています。

JVCは、難民、そしてそれと同様の窮境にある人々に対し、できる限りの援助を継続的に行うことを目指しています。常時50人近くの各国のボランティアが、タイ国内のラオス・ベトナム・カンボジア難民キャンプや、バンコクのスラム街において活動を続けています。

また今年に入ってから、タイのみならず、カンボジア国内での井戸掘り調査やシンガポールでの活動を始めました。

東京連絡事務所は、こうした活動の情報、人材、資金を現地と結ぶ日本の窓口として機能しています。

JVCでは

難民救援活動をより充実したものにすため、以下の募金を受け付けています。ご協力をお願いいたします。

インドシナ難民救援募金 (6月小計 1,941,200円)

東京連絡事務所を窓口にしてバンコクに送られ、各難民キャンプでのプロジェクト費にあてられています。

ボランティア募金 (6月小計 34,000円)

現地で活動しているボランティアのための栄養および健康管理費にあてられます。

クロントゥーイ・スラム募金 (6月小計 10,000円)

バンコク クロントゥーイ・スラムの児童への奨学金などの学費援助、スラム内の図書館および電気工養成訓練所の運営費などにあてられています。

送金方法

住所、氏名、募金種目名を必ず明記の上、下記の郵便口座にお振り込みください。

口座番号: 東京 9-27495

加入者名: JVC 東京連絡事務所

※ 会計の都合上、「Trial & Error」の購読申し込みとは別に送金くださるようお願いいたします。

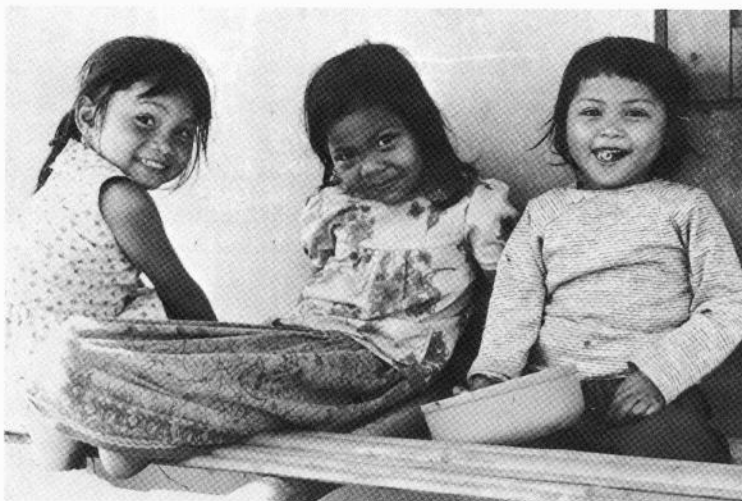
「Trial & Error」年間購読申し込み方法

一般購読者 1口 3,000円 (1冊送付)

賛助購読者 1口 10,000円 (4冊送付)

郵便口座番号 東京 3-54186

住所、氏名、年齢、職業を明記の上、購読開始月をお書き添え下さい。



本部 Japanese Volunteer Center
67 South Sathorn Road
Bangkok, Thailand
TEL 286-4857

発行所 JVC東京連絡事務所

〒166 東京都杉並区阿佐谷南1-1-5
三笠ビル3F 最寄駅 丸の内線新高円寺駅
TEL 03(316)3253

昭和57年 8月20日 発行
毎月20日発行

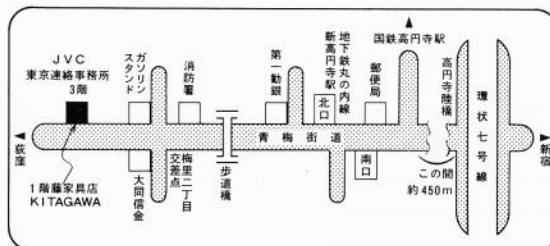
発行人 税田 芳三

編 集 人 田 島 誠

表紙撮影 押原 譲

裏表紙撮影 加藤 明彦

印刷所 (株)ベスト・プリンティング



定価 1部300円